

GO GREEN 緑でいこう

21世紀の物語、はじめよう



11/30-12/12にかけてパリで行われた国連気候変動枠組条約締結国会議(COP21)に各国から集まったGREENS。写真はClimate Finance seminarが開催されたTara Pavilion



12/13投票の東京都小金井市議補選(定数2)で、会員の坂井えつ子さんが初当選。前回60票差で惜敗した雪辱を果たしました



国内での温暖化対策を進めるため、緑の党では街頭アピールの他、全国の自治体への申し入れと、12月議会での一斉質問を実施。写真は11/20 川勝平太静岡県知事への申し入れ

「民主主義ってこれだ」の「これ」を考える

コスタリカの国会(右手)前。たまたま通りかかった時、消防士たちがデモを行っていた。話を聞いてみると、ちょうど消防法の改正を議論しているところらしい。もちろんサウンドカーも出ている。だがその車は普通の作業用トラック。ターンテーブルを小気味よく回しているのも、作業着姿で50がらみの労働者然とした男性だ。ビートの効いたアップテンポのラテンソングが官公庁街を支配する。SEALDsのようなデモは、この国では若者の特権ではない。彼らははしご車を出動させ、議場の審議にあわせて議事堂の真上からサイレンを鳴らして「主張」を伝えていた。日本では両手に余る法令に反することかもしれないが、この国では当たり前前の光景だ。警官はいるものの、苦笑いしながら遠巻きに様子を見守っているだけ。コスタリカでは毎週のように誰かがデモをしている。バナナ農園労働者、タクシー運転手、教職員組合。「お祭り選挙」で有名なコスタリカだが、彼らの民主主義は選挙だけに終わらない。コスタリカの国会前では、日本とは違った形の「民主主義」を垣間見ることができる。(撮影:足立力也)



2015年9月19日午前2時18分、日本の民主主義と平和主義は死亡宣告を受けた。その瞬間、民主主義と平和主義への死刑が執行された現場前では、まるで葬送曲のように、高らかなコールが鳴り響いていた。「民主主義ってなんだ?」「これだ!」「いいこれだ、民主主義の終わりなのか、はじまりなのか。あるいはその両方なのか。いずれにしても、日本の民主主義が次の段階に入ろうとしていることはもはや疑いようがない。そこで、民主主義について、ここで一度立ち止まって、根っこから考えてみたい。

どうして民主主義国で「参画型民主主義」を訴えるのか

私たちは民主主義を標榜している。グローバル・グリーンズ6つの原則のひとつは「参画型民主主義」(participatory democracy)だ。しかし、私たちは日本という民主主義国家に住んでいる。私たちが以前と同じグリーンズとして早くから活動していたオーストラリアやドイツの緑の党も、同じように民主主義国でありながらこれを掲げている。いったいどういうことなのか。彼らや私たちが住んでいる国は、実は民主主義国ではないのか。

民主主義には、「制度」と「理念」の2種類がある。議会や選挙は「制度」。私たちが目指しているのは「理念」。まずそれを、明確に分けて考えたい。

理念としての民主主義とは?

理念としての民主主義においては、そこにいる一人ひとり全員が「主権者」であることが前提になる。主権者とは、自分たちが住んでいる社会を規定する(＝決める)最終責任者ということだ。

私たちがすべて等しく、自分たちの住んでいる社会について決めるためには、まず私たち全員が教育を受け、考えて判断することができなければならない。次に、考えて判断するための材料となる情報を知らねばならない。そのうえで、一人ひとりの判断は異なってくるので、誰がどういう意見なのか全員が意見表明できなければならない。さらには、すべての人が決定プロセスに参加できなければならない。最終的に、その決定によって起きた出来事に、皆が責任を負わねばならない。それが主権者の主権者たるゆえんだ。

ここから、みな等しく教育を受ける権利、知る権利、表現の自由、政治的活動の自由が保障されていることが、理念としての民主主義の土台となるのが分かる。言葉を変えれば、こういった「基本的人権の尊重」こそ、民主主義の理念を具現化するために最も重要だということだ。

対話こそ民主主義プロセスの土台

さらに、民主主義によって社会のものを決定する過程(プロセス)を考えてみる。簡単に言うと、話し合つてものごとを決めたり問題を解決したりしようよというところが、そのプロセスの要だ。その話し合いは、「対話」(dialogue)によらなければならない。対話とは、水平的(同じ高さ)な立場でお互い話し合うことである。立場の違いが話し合いの身に影響されると、それは話し合いではなく容易に押し付

け暴力となつてしまふ。社会的地位、財産、民族や国籍、性別など、互いに持つている「差異」を取り除いて話し合うことこそ、理念としての民主主義に求められることなのだ。つまり、民主主義とは徹底した非暴力主義の体現なのである。

制度としての民主主義とは?

制度としての民主主義は、理念としての民主主義を可能な限り実現するために作られる(はずの)システムのことだ。世界史上初の民主制と言われるアテネの政治システムでは、全員が参加してものごとを決める「直接民主制」が取られていた。だがそれは、小さな都市国家だったから可能だったことで、国家が大きくなり、人数が増えると、全員参加でものごとを決めるのが難しくなる。そこで、ある程度意見を取りまとめる「代表」に、みんなの代わりに決定プロセスに参加する資格を持たせたのが、「代表制民主主義」だ。その代表を選挙で選ぶことにすれば、近代民主主義制度が一応の完成を見る。

民主主義の破壊はなぜ起るのか

興味深いのは、この近代民主主義制度は、みずから民主主義の理念を破壊することにも使えるということだ。選ばれた代表者たちが、民主主義の理念を剥奪するような法律をつくれれば、それは容易に実行できる。麻生太郎副総理が「ナチスの手口に学んだらどうかね」といったのは、まさにこれにあたる。たとえば、表現の自由を制限したり、情報を秘密にして人びとに知らせなかったり、選挙に立候補するときにうんとおカネがかかるようにしたりといったことをすれば、民主主義の理念は、民主主義の制度の下でどんどん破壊される。そしてそれこそが、今まさに日本で起きていることなのだ。現在の日本では、近代民主主義システムが対話を拒否することで暴力を働くのが日常茶飯事になっている。沖縄の基地問題が最たる例だが、同じような構図は枚挙にいとまがない。その源泉は、「選挙至上主義」だ。つまり、選挙で勝てば政治的決定権を全権委任されたとする考えである。

選挙で代表を選ぶことの限界

しかし、選挙は必ずしも民意を反映させるとは限らない。第一に、選挙制度が一定のクラス(層)に有利につくられていると、正確に民意を反映させられない。高額な供託金制度は、明らかに富裕層や既得権益者に有利な選挙制度であり、とても公正なものとは言えない。第二に、選挙に有利なのは、選挙のテクニックがうまく、資金が

潤沢な人や党だということだ。選挙に強い事と、大衆の意見を反映しているかどうかは、残念ながら別問題だということだ。第三に、選挙前に起きていなかった、選挙後に問題となったことに関して、当選者はその意見を有権者に問うていない。そして第四に、「権力は必ず暴走する」という一般法則があることだ。

私たち一人ひとりに課せられているもの

これらの制度的問題を乗り越えるために必要なのが、理念としての民主主義を、制度としての民主主義にどう反映させるかという課題である。ここで、もうひとつの民主主義の定義が生まれる。それは「プロセス(過程)としての民主主義」だ。上記のように、民主主義制度は必ずしも民主主義的理念を実現させられるとは限らない。むしろ、その逆に走ることもある。だからこそ、制度を飛び越えたところで、制度が理念から外れようとするのを常に監視し、止め、戻すことが、私たち一人ひとりに課せられているのだ。小さくさまざまな社会運動が民主主義の名において正当性を持つのは、制度としての民主主義は不完全だからであり、過ちも犯すからだ。

そのため、私たちは常に考え、動かねばならない。これは大変面倒なことなのだが、それが私たちが選んだ「参画型民主主義」という価値観なのだ。戦後70年を迎えた今こそ、私たちがスタートラインとして設定すべきなのは、まさにこの「民主主義とは私たち一人ひとりが動き続けること」という認識なのではないだろうか。



足立力也
北九州市立大学非常勤講師(国際関係学/平和学)。コスタリカ研究者。緑の党運営協力スタッフ(国際部)。著書に「平和をつくる教育」(共著、岩波ブックス)、「丸腰国家」(扶養社新書)、「緑の思想」(幻冬舎リネッサンス)など多数。

BOOKREVIEW 『平和ってなんだろうー「軍隊をすてた国」コスタリカから考える』(岩波ジュニア新書)



約60年に渡り軍隊を持たずに平和国家を維持しているコスタリカ。その礎は発達した民主主義にあった。「民主主義と軍隊は相容れないものだ。もし軍隊があるのであれば、そこに真の民主主義はない」そんな風に考えるコスタリカ人の価値観・文化を探りながら、平和のつくり方について考える一冊。



エコロジカルな知恵



社会的公正・正義



参加民主主義



非暴力・平和



持続可能性



多様性の尊重



歴史を乗り越える

——数々の選挙で示された沖縄県民の民意を無視して進められている、米軍普天間飛行場の沖縄県名護市辺野古への移設計画。対立を乗り越えより良い未来を築いていくために、わたしたちは何からはじめればよいのでしょうか？ 元衆議院議員（沖縄4区）で、2012年衆院選の緑の党推薦候補でもあった瑞慶覧長敏さんに、沖縄からメッセージをいただきました。



COP21

未来を変える 手をつなごう、前へ進もう。

～歴史的快挙！196カ国での合意達成～

2015年12月12日夜（現地時間）、全世界196カ国が参加したCOP21（国連気候変動枠組み条約第21回締約国会議）において、「パリ協定」が採択されました。温室効果ガスの削減目標を先進国だけに割りあてた京都議定書体制と比べ、今回は参加した196カ国すべてが産業革命以降の気温上昇を1.5℃、2℃未満に抑えることを決意したものです。気温上昇を1.5℃に抑制するという目標は、小島嶼国連合や一部の開発途上国だけでなく、グローバルグリーンズ憲章や緑の党グリーンズジャパンが主張してきた数値でもあります。

産業革命以降の経済発展は、いわば地球上の複雑な気候システムの一部を担っている炭素循環を破壊することで得られてきました。経済成長の結果、炭素の吸収源となってきた森林は破壊される一方で、大気中の二酸化炭素の濃度は今や400ppmを超え、地球の平均気温も0.8度上昇しました。異常気象の頻度も増加し、2015年は気温統計をとりはじめた1850年以降で最も暑い年となります。

気候変動会議は、これまで各国の利害が対立した結果、何度か挫折してきました。その度に「未来の地球を救うために何を躊躇するのか？」と思ったものです。しかし、今回196の国々が団結して、これまでの枯渇エネルギーを中心とした経済発展モデルを見直し、地球の気候を保護するための枠組みをつくらうと努力しながら合意に到達できたのは人類史的快挙と言えます。今後、経済成長を中心としたライフスタイルからの転換が一層議論され、グローバルネットワークをもつ緑の党が果たす役割と責任もますます大きくなっていくのではないのでしょうか。（緑の党共同代表 長谷川平和）

上写真：11/30、パリ。1万人の「人間の鎖」で合意達成への想いをアピール。

沖縄は137年前まで 独立国家だった

グスーヨー、イイソーグワチデービル。皆様、明けましておめでとうございませう。

沖縄とヤマト（沖縄では日本本土のことをヤマトと呼ぶのが一般的）の歴史と文化には大きな違いがあります。137年前まで沖縄は琉球という独立国家だったわけですから、その違いは当然と言えば当然かもしれません。

冒頭の挨拶はその一例です。ここ数年、米軍基地問題をめぐり、沖縄県と日本政府が激しいやり取りをしてきています。特に、翁長雄志さんが知事に就任した後は、ますます激しくなり、ついには国と県との裁判闘争にまで発展してしまいました。本当に悲しいことです。第2次世界大戦が終わったからの71年間、沖縄ではずっと基地問題で揺られてきているのです。

やるせない気持ち

71年前は、沖縄にも日本本土にも米軍基地はありませんでした。今現在は、日本本土にも沖縄にも米軍基地が作られ、その約74%が沖縄に集中しています。日本の国土の0.4%にすぎない沖縄に日本の米軍基地の74%が置かれているのです。「沖縄の中に基地があるのではなく、まるで基地の中に沖縄があるみたい」と表現

した方がいますが、まさにその通りです。異常ですよね。なぜここまで沖縄に集中することになったのでしょうか。なぜそれがいつまでもたつても解決されないのでしょうか。そもそもヤマトの方たちはそれを知っているのでしょうか。それを疑問に思わないのでしょうか。沖縄ではそのようなやるせない気持ちでいっぱいなのです。

今も忘れられていない 400年前の「琉球処分」

1879年に琉球王国はヤマトに滅ぼされます。「琉球処分」と呼ばれている出来事です。琉球王国は長い間、国と朝貢関係にありました。1400年代の明の時代から始まったと言われています。当時の琉球は、親分中国の庇護の下、多くの恩賜を得ていたのです。その旨味に目を付けたのがヤマト

でした。1609年に薩摩藩が琉球に攻め入ります。薩摩は賢くて、「親分中国にはばれないように琉球を支配しましょうからです。琉球は、独立の体は保ちながらも裏で薩摩に牛耳られるという誠に不名誉な事態に陥ってしまうのです。民族のプライドというか自尊心をぐちゃぐちゃにされ、人頭税などそれこそ理不尽なまで薩摩に搾取されていくことになるのです。今から400年以上前の出来事ではありますが、私も含めて多くのウチナーンチュ（沖縄

人）がそのことを忘れないでいます。沖縄がどんなに反対しても、力でもって押し通そうとする。昔は中国にばれないように、今はアメリカにばれないように進めようとする。遠すぎる沖縄で何が起きているのかヤマトからもぼんやりとしか見えて来ない。それをいいことにヤマト政府は沖縄で横暴を繰り返す。そんな構図が見えてくるのです。沖縄にとつての米軍問題は、実はヤマトと沖縄の問題といえるのかもしれない。

米軍問題はヤマトと沖縄の問題

沖縄がどんなに反対しても、力でもって押し通そうとする。昔は中国にばれないように、今はアメリカにばれないように進めようとする。遠すぎる沖縄で何が起きているのかヤマトからもぼんやりとしか見えて来ない。それをいいことにヤマト政府は沖縄で横暴を繰り返す。そんな構図が見えてくるのです。沖縄にとつての米軍問題は、実はヤマトと沖縄の問題といえるのかもしれない。

負の歴史を乗り越え、 新しい未来を

恨みつらみは問題解決には何の役にもたちません。しかし事実を知ることとは大いに役に立ちます。そのことが相手の心情をおもんばかることになり、ひいては信頼関係が深まることになるからです。沖縄では今でも毎日、住民が体を張って沖縄の声を通すため頑張っています。その中には、ヤマトの方々も国外の方々も大勢います。一緒に歴史を乗り越えて行きたいと強く思っています。

※琉球処分最近琉球併合を使う
瑞慶覧長敏（すげらんちょうびん）1958年生まれ。米国セントラルウィントン大学卒、琉球大学卒。英語教室・学童保育経営・平和活動に取り組み中。2009年衆議院議員当選。現在は英語教室経営/東アジア共同体研究所琉球・沖縄センター次長。

(2015年版)

緑の党の新しい ポスターとリーフレットができました

ポスター
誰のものでもない、ひとつの地球の上で、平和に共存していくために、話し合いを重ね、わたしたちの答えをみつめていきたい。そんなわたしたちの想いと決意を表現しました。店内・近隣に貼って下さる方を募集しています。大きさはA2(ほぼ新聞紙大)です。

リーフレット
緑の党のなりたちや理念、組織、活動内容などをシンプルにまとめました。A3を二つに折り、さらに3つに折る六つ折リーフレットです。緑の党の宣伝や案内に、ニュースレターなどとともにご使いください。

料金：ポスター1枚150円(A2) リーフレット1部20円
購入申込みは greens@greens.gr.jp まで。

自治体選挙 2015年9月～

11/01	高向 吉朗	京都府亀岡市長選	支持	新人	残念
11/15	佐藤かずよし	福島県議選	支持	新人	残念
12/13	坂井えつ子	東京都小金井市議補選	推薦	新人	当選
2/7	野口 修	茨城県つくばみらい市議選	推薦	新人	

足立力也 講演会情報

- 東京 1/15(金) 19:00～21:00 @中野区立商工会館
『丸腰国家』コスタリカの平和と日本の戦争法案 何が違うの?!
足立力也さんにじっくり聞こう
- 千葉 1/16(土) 13:30～16:30(予定) @市川アイリンクホール
「軍隊をすてた国・コスタリカはこうして平和をつくってきた」
- 千葉 1/17(日) 13:30～16:30(予定) @浦安市民プラザWave101中ホール
「安保法制へのオルタナティブ～こうすれば平和はつくれる!」

※詳しくは緑の党ホームページをご覧ください。

COP21 パリ会議報告会

～法的合意・パリ協定の意味を探る～

パリ協定で世界はどう変わるの？ 法的意味は？ 世界経済は？ 日本のビジネスは？ 自治体の対応は？
パリ会議に参加したNGOメンバーによる報告会開催！

日時：2016年1月29日(金) 14:00～16:30 場所：ベルサール神保町 Room3-5 講演：小西雅子(WWFジャパン)/小野寺ゆうり(国際環境NGO FoE Japan)/平田仁子(気候ネットワーク)/山岸尚之(WWFジャパン) 主催：Climate Action Network Japan(CAN-Japan) 問合せ：TEL 075-254-1011

詳しくは
CAN-Japanホームページ <http://www.can-japan.org/>

緑の党

http://greens.gr.jp
E-Mail greens@greens.gr.jp

〒166-0002
東京都杉並区高円寺北2-3-4 高円寺ビル601
TEL 03-5364-9010 FAX 03-3223-0080

カンパにご協力を!

城南信用金庫 高円寺支店(店番号036) 普通預金
口座番号:340392 名称:緑の党グリーンズジャパン

郵便口座 ゆうちょ銀行
口座番号:00100-9-262967 名称:緑の党
他金融機関からのお振り込みの場合 当座預金
店名:〇一九(ゼロイチキュウ) 口座番号:262967

連載コラム ～飲み屋のオヤジの小さなつぶやき～ 土へ生業へ

私 一人暮らし、通称「タマツキ」には、毎晩、多様な変人が現れる。5アンペア以下で暮らす女性、田舎にゆくと家族、家を自ら創ってしまった男性、自給自足するミニマリスト……。一方、この社会に翻弄される人生迷子も虚ろな目で毎夜現れる。サラリーマン、非正規、フリーター、引き籠り、うつ、自殺を考えている方まで、日本中から老若男女が！ 経済なんてよくなってない、現場での実感だ。しかし、彼らは前述の未来に歩み出した人たちに会い、交わり、コラボし、導かれ、ヒントを得、目を生き返らせて家路に着く。パーは人生のCrossroad Bluesだ。

モノの少ない暮らしのミニマリストが増えて流行語にも選ばれた。GDP600兆円を目指すアベ政治からしたらそんなヤカラは非国民だろう。ミニマリストは生きる悟りにも近づける。モノを多く所有したとて渴望感だけが増して幸せになれない。全てのモノは変化し常なるモノなどない、自分のモノなど何もなく肉体系え所有物でない、とラッダも「諸行無常諸法無我」と説いた。循環の思想だ。物質主義からの解放は知足感幸福なのだ。

私達は嫌が応にも低収入社会に向かい行く。経済成長願っても実際は受動的低収入に陥るのが今の現実のオチで不幸極まりない。しかし自発的収入選択人は少々でも自給し、足りないモノは自作したり人と協力して分かち合う。消費と所有が減れば、最低限の収入+@を小さなナリワイでも賄える。ワークシェアで人の仕事の数を増やし、おのおのは時間と自活力を増やす。人類が生きていくための清貧ならぬ「清貧」な暮らし。成長を目指す人も悪くない。がそんな人ほど苦しい。幸せと変革の先取りにはダウンシフトが、いい。写真・店内にて、右から高坂、スロイ、フーデを広げる島村菜津さん、水俣で無農薬茶を栽培する天野浩さん

高坂 勝 東京池袋にOrganic Barを独り営み人々を生業/自給/地方移住などのダウンシフトにそのかし続ける。NPO SOSA PROJECT 創設。緑の党初代共同代表。著書『減速して自由に生きるダウンシフターズ』

